

アクティブ・ラーニングに関する一考察 —高等学校における英語の協調学習—

郷司 雅子

1. 英語教育改革

国際化やグローバル化ということばを様々な場面で見聞きし、高校の授業においてもコミュニケーションのツールとして、使える英語力の習得を目指す方向になっている。文部科学省が示す次期学習指導要領や中央教育審議会答申においても、次々と方策が示されている。例えば、文部科学省は、初等中等教育の英語教育の推進に係る取り組みの中で、英語力向上、教育課程の充実、教員等の資質・能力の向上、そしてその体制整備を具体的に進めている。しかし、外国語教育のなかでもとりわけ英語教育においては、授業形態や指導法等に関する改革は、昔から常に現在進行形で叫ばれてきた。

昨今、グローバル化に対応した英語教育改革が実施される中で、アクティブ・ラーニングということばが飛び交うようになり、高校の教育現場においても協調学習や協働学習を取り入れる動きが加速している。同時に、大学入試改革も進み、「大学入学希望者学力評価テスト(仮)」の実施に向けて、アカデミックな英語運用能力を育成する動きが目立っている。また、英語教育においては、既に民間の外部検定資格試験の活用が広まっているところでもある。もはや、大学入試だけを目標とした教育活動では不十分である。生徒が身に着けた学力が社会に出てからも活用できるスキルとなるよう、授業における英語の指導方法も変わる必要がある。つまり、生徒が将来、社会に出てから活躍できるよう、グローバルな視点で学ぶことができる教育活動を展開することが求められる。

教育現場に目を向けると、英語に限らずどの教科においても、知識を詰め込むだけで終わらせるのではなく、詰め込んだ知識を活用し、思考を深め、自分で判断し、自分なりの意見を表現する力が求められるようになってきている。つまり、生徒の思考力・判断力・表現力を向上させ、グローバルな世界で通用する生きる力を身につけさせ、そのために、より実践的な授業を展開するよう、授業自体の改善が我々に求められている。

そこで、本稿ではまず、筆者の前年度3年生の授業と今年度2年生の授業での実践に基づいた指導法を1年間のスパンで紹介する。同時に、協調学習を成功させるために必要不可欠な日頃の授業での取組を提示する。また、アクティブ・ラーニングの手法のひとつであり、埼玉県立総合教育センターが全県で推進する「知識構成型ジグソー法」という協調学習を取り上げる。さらに英語教育の改革にも目を向ける。

2. 年間の活動実践に基づいた指導法と成果

生徒の4技能を統合的に向上させるために、筆者が実践した1年間の授業における指導法を提示する。日々の授業において段階的に指導し、生徒が楽しみながら言語運用能力を高めつつ、その上達を実感できるような授業を目指している。

4月当初の活動としては、自己紹介を取り入れることが有効である。それを他者紹介という形に応用し、“I like to play baseball.”という情報を“My partner likes to play baseball.”と言い換えるトレーニングを積ませる。主語を言い換えなければならない場面を設定するわけだが、三人称単数現在形の-sという習得したはずの文法事項は、高校生でも間違える。これを正しく使えるようになるレベルまで持っていく。同様に、所有格の言い換えも自然にできるよう繰り返し行う。このインタラクションはペアを入れ替えることで飽きずに続けることができる。また、担任や他の教科担当者の名前、部活動、好きなスポーツ・食べ物・有名人、行きたい国や将来の夢、週末の予定や最近のニュースなど、トピックの設定で難易度を変えることが可能である。“I like pizza and I will go to the Italian restaurant with my family this weekend.”を“My partner likes pizza and she will go to the Italian restaurant with her family this weekend.”と主語を変えても正しい代名詞を用いてスムーズに言えるようにする。さらに、コメントを付け加えたり、関連した質問を行うなど、小さなステップアップを積み重ねることで、徐々に使える表現を増やしていく。教科書の題材内容に関連付けたり、既習の語彙を活用させるような質問をしたり、習得した不定詞や動名詞などを必ず使用するようにと指示を出すことも有効である。

7月までの3か月間で、教科書の題材を活用したRetellingやSummary Writingを積み重ね、同時にコメントとして自分の考えを表現する場面を増やすと、日頃から考えながら読む活動を取り入れることになる。生徒は意識しなくとも、教員はこの段階的指導をコントロールし、様々な日常的・社会的な事象に対する自らの考えを表現させるように仕向ける。外部資格試験において、意見を述べる問題が難しいという声をよく聞くが、日頃からこのようなトレーニングに取り組ませ、何かしら自分の意見を述べる機会を設けることで、対応できるようになる。

9月の授業では、7月の活動を思い出させることから始める。長期休業中にはfluencyが下がる傾向にあるため、まずはその英語運用能力を回復させる必要がある。長期休業の直前に実施していた活動内容と同じレベルのものでfluencyが回復したことが確認できてから、10月に入り次の段階に上げるのが望ましい。Retellingは授業内で継続

して行い、教材の難度が上がることを踏まえ、Writing 活動では Summary も行いつつ、Opinion Writing のウエイトを徐々に増やすようにしたい。ただし、Brainstorming なしにいきなり意見を書かせようとしても無理がある。生徒は言えるようになったことは書けるので、まずは授業中にペアワークなどで発言させ十分に口頭練習をさせることが望ましい。この活動中に文法的なエラーを修正し、またふさわしい表現を適切に使えるようサポートする必要がある。このように指導すれば、宿題として Opinion Writing を課しても、授業で行った内容を思い出しながら自分のことばで表現できるようになる。また、できなければならない。最初は 3、4 文程度の長さから始めると、生徒への負荷も小さい。

12 月までに、教科書の題材に関連した様々な話題について Opinion Writing の課題を設定し、多くの Writing の機会を設ける。同時に、A4 サイズ 1 ページ分など、まとまった量の英文を書かせ、段落構成についての指導も行うとよい。ここで、マッピング活動を踏まえた作文指導を行い、OREO の流れを意識させる。つまり、Brainstorming を経て、Opinion, Reason(s), Example(s), Opinion という段落構成で、論理的な文章を書くための思考力を育成するのである。

1 月からの 3 か月間を最終段階とし、過去に扱った題材について再度触れたりして、もっと長い文章を書かせたり、他人の意見を評価する Writing 活動を取り入れたり、あるいは社会的な事象やニュースになっている話題を取り上げる。

ここに 1 年間の流れを説明したが、必ずしも Writing 活動に重点を置いているわけではない。4 技能の育成には等分に取り組むべきであり、聴いたり読んだりして取り込んだ知識や情報を、話したり書いたりして表現する活動につなげることで、英語の運用能力を統合的に向上させるのである。1 回の授業の組み立てには、語学教育研究所が示すように、Oral Introduction, Explanation, Reading Aloud, Consolidation のように音声中心の指導手順を取り入れるとよい。最終的には、Writing の内容や表現を見れば、生徒がどの程度の英語を使えるようになったかがわかる。

添削指導が重要だと思われるかも知れないが、これは、時間をかけるだけの効果をそれほど期待できるものではない。生徒は、丁寧に添削されたプリントを返却されても、大抵はちらりと見て終わりなのである。赤ペンで適切な表現を書き込んだり、三人称単数現在形の-s を書いてあげたりするのではなく、教員はスペルミスや文法等の誤用が認められる箇所に下線を引いたり、不足している語(句)があることを指摘するのみに留め、生徒自身に気づかせたい。生徒本人が自ら気づいて初めて、そのエラーは無くなるか減るのである。多くの生徒に頻繁に見受けられるエラーを返却時にクラス全体に伝え、意識させることは有効である。教員からのフィードバックを受け、書き直させて再提出させることはさらに効果的である。“I think I want to agree with her.” を “I agree with

her.”と表現させるには、日本語の介在を取り除く必要がる。また、“Irena Sendler should be worth receiving the Nobel Peace Prize. Because she saved as many as 2,500 Jewish children.”という一見長い文を書けても、because の使い方を間違えるのはよく起こることである。この because の誤用は、Why ~? の質問文に対する応答が Because ... であることに起因するのだろうが、口頭ではこの誤用は分からないため、やはり書かせることが求められる。この because の誤用は、単・複数形の呼応と同様に、最後まで改善しにくいエラーのひとつである。教員は根気強く指導することが必要である。

1年間という時間をかけて生徒の4技能を統合的に指導すると、かなりの生徒が英語に対するアレルギー反応を薄める。生徒の発話量を増やしつつエラーを減らすよう、教員はサポートする意識で、寄り添う指導を心がけたい。“I sinku zattou”で沈黙するしかなかった生徒も、“I think that his decision was right.”とすらすら言えるようになる。ここまでの指導で、教員は常にいやな顔をするのではなく、笑顔でできるようになったことを褒め、生徒一人ひとりの英語力を伸ばしてあげたいという姿勢で指導を継続したい。

教室の中だけでなく、廊下等教室の外での声かけや指導も、生徒の心に直接響くものであり、大きな影響力を持つ。授業の前にある1人の生徒に対し発音矯正をほんの少し行い、授業中に何事もなかったかのように指名し、出来たことを全員の前で褒める。周囲の見る目が変わり、出来るようになったことが自信につながる。また、Writing の添削指導で、コメントの中に最近の頑張りを褒めることも忘れずに書き添えたい。

3. 埼玉県が取り組んでいる協調学習

埼玉県立総合教育センターでは、東京大学 大学発教育支援コンソーシアム推進機構 (CoREF)¹との研究・連携を行い、全教科において生徒同士の学び合いによる協調学習を推進している。2010年度に「県立高校学力向上基盤形成事業」がスタートし、研究開発校に指定された県立高校10校の教員26名が関わった。2012年度からは「未来を拓く『学び』推進事業」とし、さらに2015年度からは「未来を拓く『学び』プロジェクト」と名称を変え、協調学習の研究・実践は引き継がれている。本プロジェクトが目指しているものは、生徒のコミュニケーション能力、問題解決能力、情報活用能力など、これ

¹ 故三宅なほみ東京大学名誉教授を中心に始まった、自治体との連携による協調学習の授業づくりプロジェクトを行っている教育機関である。CoREF (Consortium for Renovating Education of the Future) は産官学と連携しながら本事業を推進している。

からの時代を主体的に生きるために必要な資質・能力の育成である。現在もアクティブ・ラーニングに関する研究として、「知識構成型ジグソー法」による協調学習の授業づくりに取り組み、この研究連携を継続・拡充させている。

7年目となる2016年度は研究開発校が102校に増え、443名の教員が研究開発員として研究・実践を行っている。どの教科においても合同カンファレンスを実施するほか、教科ミーティングで授業案等の研究・開発及び検証を重ねている。また、ホームページ上で授業案等の共同開発や情報共有を促進している。その成果をシンポジウムで発表し共有することで、さらなる広がりを見せている。本プロジェクト終了時の目標は、アクティブ・ラーニングが教育現場において当たり前になっていることである。

3.1 「知識構成型ジグソー法」という手法

知識構成型ジグソー法とは、協調的な学習方法の1つである。あるテーマについて3種類の異なる視点で書かれた資料を配付する。グループに分かれて資料から必要な情報を読み取るエキスパート活動があり、次に、自分のことばで説明を行い、情報を交換するジグソー活動がある。そして、交換した情報・意見や知識を総合してテーマ全体の理解を構築したり、それを全体で共有するクロストーク活動に移る。これらの活動を通して、生徒にそれまでとは違った観点で物事を考えさせ、自身の意見を積極的に表現するなどの主体性の面で顕著な成長が見られれば成功と言える。そういう仕掛けを作ることが学びを引き出すために大切である。資料を読み取るエキスパート活動のみなら従来の一斉授業でよい。

情報・意見交換を行うジグソー活動やクロストーク活動をいかに活性化させるかが重要であり、そのためには普段からペアワークやグループワークを多用し、考えさせる場面を設定し、少しずつ負荷をかけていく積み重ねが活きるのである。つまり、普段の授業から活発な言語活動を行い、4技能の育成を視野に入れて言語活動に取り組みしておく必要がある。そして、生徒の知識・技能を引き出す活動、生徒の思考力・判断力・表現力を豊かにする授業、生徒の主体性・多様性・協調性を伸ばす学習につなげる。

知識構成型ジグソー法の授業では、普段の授業で身につけた英語運用能力を最大限に活用し、その授業で初めて与えられた問いや資料に関して、生徒が主体的に取り組み、読み取った情報や考えを交換し共有する。そして、意見交換等で思考が深まり、最終的には自分のことばで口頭発表を行い、文章にまとめる。これは、学習指導要領に明記された学習目標にのっとった展開の過程であり、知識構成型ジグソー法を取り入れた協調学習から得られる成果でもある。

3.2 知識構成型ジグソー法の授業を成功させるために

普段から多量の英文に触れさせ、インタラクションを多く取り入れることで、お互いに協力して取り組む姿勢を形成しておく。題材となる英文の読解をしっかりと行い、背景知識や既知の情報を持ち合わせた段階で、その応用編として知識構成型ジグソー法の授業に臨むと、理解がさらに深まり、記憶の定着が図られる。4 技能の統合的な指導が定着していれば、英語の運用能力をベースに活動を活発化させることが期待できる。さらに、授業展開のプロセスに生徒が習熟してくると、スムーズに進行でき、生徒の主体的な学習活動がより活発になり、生徒同士の学び合いがより深化していく。

3.3 知識構成型ジグソー法の授業展開例

知識構成型ジグソー法の授業は、毎回の授業で行うというよりも、学期に 1 回程度実施するとよい。普通の授業で十分に Input し身につけた語彙や文法、構文等の英語力を活用して Output させる活動に取り組ませるのである。それにより、知識を広め、題材に対する理解を深めると同時に、英語の 4 技能を活用して自分の意見を表現できるようにさせる。その授業展開例は次のようになる。1 コマの授業の中に次の 5 つの活動を取り入れる展開を基本とする。

①Pre-Writing 活動:

答えが複数あり、人によって答えが異なるような問いを 1 つ提示する。
提示された問いに生徒全員を各々取り組ませる。

↓

②エキスパート活動:

図 1 のように、3 人グループを作る。
各グループに A, B, C の 3 種類のうちいずれかの資料を割り当てる。
各資料は、①で設定した問いを解答するのに有効なものとする。
グループで協力して内容の理解と情報の整理に取り組ませる。

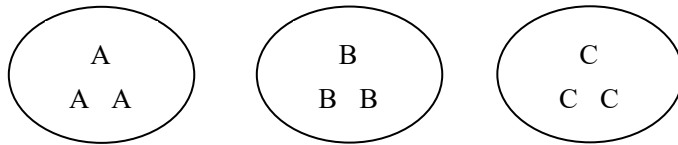


図1 エキスパート活動時のグループ分けのイメージ

↓

③ジグソー活動:

図2のように、A, B, Cそれぞれの資料を読んだ生徒3人でグループを再編成する。

再編成したグループでA, B, Cの資料に関する情報を交換させ、内容を共有させる。

①の問いに対してグループとしての意見をまとめさせる。

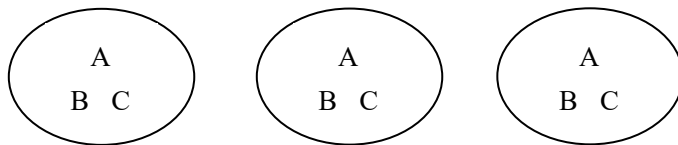


図2 ジグソー活動時のグループ分けのイメージ

↓

④クロストーク活動:

それぞれのグループが③でまとめた意見をクラス全体に発表する。グループ数が多い場合は、発表グループ数を減らすか、あるいは semi-round を経て final-round 形式で発表させる。

↓

⑤Post-Writing 活動:

①で取り組んだものと同じ問いに再度、各々取り組ませる。

①の Pre-Writing と⑤の Post-Writing の活動に関しては、書かれた英文の量や内容がどの程度良くなったかが生徒本人にもはっきりと認識できるほど、成果は顕著に現れる。そのためにも、②から④までの活動を充実させ、⑤の Writing 活動に活かすような仕掛けになっていなければならない。また、正解が1つではない問いに取り組ませることで、様々なものの考え方に触れさせることになる。⑤の段階で生徒は個人で Writing

活動を行うが、グループでまとめた意見と異なる内容を書いてもよい。

時間配分を気にしつつも、エキスパート活動は気長に構えることが望ましい。急ぎ足では消化不良になり、その後の活動が上手く機能しなくなってしまう。前提条件として、ジグソー活動とクロストーク活動の活発化には、普段の授業での4技能を統合した指導の積み重ねが不可欠である。また、当然のことながら、3種類の資料と問いの設定が非常に重要である。

知識構成型ジグソー法を取り入れた協調学習を行う意義は、学習指導要領に明記された目標にも合致しており、次のようにまとめることができる。つまり、カリキュラム・マネジメントを考えることで、長期的な視野で学習到達目標の達成に結びつけることができる。CAN-DOリストを踏まえ授業改善を積み重ねることにつながる。さらに、生徒同士のインタラクションによる相互作用を期待でき、言語活動を活発に行う実技科目として英語の授業を実践できる。これらが、生徒の4技能の統合的な育成につながる。

3.4 知識構成型ジグソー法の授業による成果

生徒自らが説明できることで主体性が伸び、グループで活動することで協調性が育まれ、異なる意見を共有できることで多様性につながる。生徒の思考力・判断力・表現力を育成することができ、英語の Input⇒Intake⇒Output の育成につながると言える。普段の授業で4技能を統合的に育成し、Output活動を強化する知識構成型ジグソー法の協調学習を行い、充実した言語活動を通して達成できる成果としては、次の3点を挙げる。

- ①情報・意見交換をほぼ英語のみで行い、コミュニケーション・スキルを高めることができる
- ②知識や情報を主体的に活用し、問題解決能力を高めることができる
- ③異なる意見を共有し、自分の考えを深めることができる

英文から必要な情報を読み取り、活用させることで、クリティカルシンキングの視点を育成し、自分の意見を表現するトレーニングを積み重ねることになる。正解が1つではない、人によって答えが異なるような問いにグループで取り組ませ、様々な意見を共有することで、複眼的なものの考え方が身につく。知識構成型ジグソー法の授業をテキストで学習した内容の深化、具体化、あるいは一般化と位置づけ、自分の意見を表現させたり、考えを広げたりすることにつながる事が可能である。

このように、協調学習を通して生徒の資質・能力の育成が可能となるのは言うまでもない。生徒の発話量が増加するため、コミュニケーション能力は向上する。また、問題解決能力を伸ばし、生徒の思考の深化につながる。ただし、他教科と異なり、英語による言語活動を充実させるためには、日頃から英語によるインタラクションを多く取り入れ、生徒がオーラルワークに慣れていることが大前提である。英語による問題解決能力や情報活用能力の育成は、4 技能の統合的な育成につながる。だからこそ、知識を詰め込むだけではなく、習得した知識と英語の 4 技能を活用した思考力・判断力・表現力の向上に結びつく。これは、2020 年の大学入試問題で求められる能力の育成になり、グローバル社会で活躍できる人材の育成につながると言える。高校生のうちに種をまくことが大事なのである。

4. 英語教員の意識改革

大学全入時代に入り久しいが、受験生はより高い目的意識を持ち大学入試に臨む必要がある。大学に入学することを目標とする時代は既に過去のものとなっている。英語を勉強する理由や目的も、大学入試を突破することは勿論だが、習得した語学力を活用し国際社会で活躍することではないだろうか。教員もこの点で意識を改め、文法や訳読中心の授業から脱却し、4 技能を統合し運用能力を向上させる授業を展開することが要求される。

一昔前の訳読式の授業では、これからの英語教育には通用しないだろうし、大学入試で太刀打ちできないどころか、生徒からは相手にされなくなってしまう可能性が高い。この危機感をまず同僚と共有することが大切である。文部科学省の動向はもとより、セミナーや研修会に参加すれば、すぐにそのことは理解できるだろうが、それを現場の教員に気づかせるには、時間がかかるだろう。しかし、目の前の生徒のことを考えるなら、前進するしかない。また、生徒が受け身の授業で良しとせず、生徒の脳を常にアクティブにさせ、つまり、常に考えさせる授業を行い、終了のチャイムが鳴ったときに「今日は頭が疲れた。」と生徒がつぶやいたときが大成功なのだ。そのくらい、教員も生徒も真剣に授業に臨み、そのためには、しっかりとした授業準備に取り組みたい。

4.1 授業改善

文部科学省が「英語の授業は英語で」教えることを基本方針とし、現場の教員の意識改革に影響を与えていることは確かである。ただし、現段階において浸透しているとは

言えない。実践していない教員も多い。中学校における英語を用いた活動中心の授業を引き継ぎ、高校においても Reading 中心の授業から Speaking や Writing の活動まで取り入れることで、生徒の英語運用能力は飛躍的に伸びるはずである。

松井(2013)は、大学受験英語から 21 世紀グローバル社会対応型の英語への転換を訴え、4 技能を同時に習得するためには、そのベースに英文読解力が必要だという。つまり、読解力を身につけることは目標ではなく通過点と考える。「訳読できる」というだけで満足してはならないし、「読解ができた」ということで目標達成ということでもない。真の読解力を身につけた上で、コミュニケーションのツールとして英語の運用能力を向上させることが必要なのである。

また、授業でできることを授業で行い、一人でもできることは家庭学習で取りまわせることとし授業中には行わないとする考え方も広まってきている。反転授業研究会は、講義形式の一斉授業で行う一方的な知識の伝授に限界を示し、多様性を重視した協働学習の可能性を探り、教師の存在意義を問っている。つまり、反転学習を取り入れることで、対面授業で生徒の学びを豊かにさせることが可能であるとする。そして、生徒の「体験値」(rich learning experiences)²の発想を最大限に発揮させるような試みを行っている。実際に、授業ではペアワークやグループワークを取り入れたり、事前に家庭学習で取り組んだことの確認作業を素早く行うことで時間を浮かせることができる。このようにして捻出できた時間を、他の活動のために活用することが可能になる。つまり、生徒は、授業で思考を次の段階に深化させることができる。同時に、コミュニケーションのツールとしての英語を駆使し、お互いに情報・意見交換を行う場面を増やすことが可能になる。

4.2 授業での英語の使用

授業は生徒の学習の場であり、生徒のレベルや理解度に応じて日本語あるいは英語という使用言語の割合や難易度を配慮することは当然である。卯城(2011)は、英語の授業においては教師はできるだけ英語を使用し、また生徒に英語を使用させる機会を多く与えることの重要性を示し、具体的な英語表現や、様々な活動例を示している。授業での英語の割合を増やすための段階的な指導法を理解し、バリエーションを広げることは重要である。まずは英語の使用を増やし、次にその質も高める必要がある。そのためにも、上智大学の CLT プロジェクトチームが、Communicative Language

² 反転授業研究会によると、「体験値」とは、「偏差値」に相対する考え方で、他者に関係なく本人自身が身体を通して感じたこと、考えたことの主観的な総体だとする。「体験値」が豊かであるほど、将来潜在能力を開花させ「偏差値」だけが良い生徒よりも活躍することができるという。

Teaching(CLT)の視点に立ち、理論的な背景から授業の実践、さらに今後の展望まで示しているように、英語の教員が外国語教育に関する知識を持ち合わせておくことは当然必要である。なぜこの活動を行うのか、今はどの段階で次は何を与えるべきか等、生徒のレベルや学習環境を踏まえた指導が重要である。例えば、Davies & Pearse (2000) や Harmer (2008)は、外国語としての英語の教授法に関して様々な角度から示しており、実践例や理論的な説明から豊富な知識も得られる。

4.3 CAN-DO リストと PDCA サイクルの活用

1 年間の授業計画、CAN-DO リストの作成と検証、PDCA サイクルによる授業改善、学期の目標、1 時間分の授業計画など、考慮することは多岐にわたる。また、教材をじっくり料理し準備するときに、必ず生徒の顔を思い浮かべ、ふさわしいレベルなのか、段階を順に踏んだ手順なのか、板書計画は適切か等を、確認しながら組み立てることは、教員にしかできない楽しみでもある。

CAN-DO リストについては、文部科学省初等中等教育局は 2013 年に既に『各中・高等学校の外国語教育における「CAN-DO リスト」の形での学習到達度目標設定のための手引き』を公表している。そして、CAN-DO リストの原典と言えるものが、欧州評議会で開発された CEFR であり、これに準拠する形で構築された CEFR-J は、日本の英語教育の枠組みに適用したものである。この CAN-DO リストの作成が全国で進み、現在は検証の段階に入ってきているはずである。

各校の生徒のレベルや環境に即した CAN-DO リストを作成・活用するには、教材研究だけでなく、3 年間の指導計画を考え、どの段階でどこまで 4 技能を伸ばすよう指導するかを考えることが重要である。また、1 回の授業内でも 4 技能を結びつけて指導するよう心がけ、統合的な育成につなげたい。生徒の気づかないところで教員は仕掛けを作り、スパイラルを上っていくように言語運用能力を上達させるべく、授業案を組み立て (Plan)、実践し (Do)、評価し (Check)、改善する (Act) ことの繰り返しであろう。

5. 英語教育の展望

村野井 (2014)によると、第二言語学習は学習者の心に光をともし、人を明るい方に導く enlightenment の働きをすることがあるという。そのためには、言語が伝える内容を重視し、全人類に関わる問題を中心に扱うのが適切であり、グローバルな問題の中には自国の文化に関する事柄も含まれるのである。高校で扱われる検定教科書が幅広い

分野を網羅し、生徒の視野を広げつつ思考を深めるような題材を載せているのは、もったいなことである。そして、異文化を受容する姿勢や国際感覚を磨くことはこれからの時代に必要不可欠な素養である。

教育現場では、外国語教育の意義と目的をしっかりと受け止め、次世代の教員に引継ぎ、間断なく生徒の言語能力を伸ばしていかなければならない。生徒は 21 世紀のグローバル社会を牽引する人材である。その人材を育成し明るい未来へ導く手助けをする立場にあるのが、我々英語教員である。その役割をしっかりと認識し、日々の授業に向き合うことが、我が国の英語教育の発展につながるはずである。使命感を大きく抱きつつも、生徒一人ひとりの英語力のわずかな向上を褒めるような声かけを日々続けたい。

さらに言えば、英語の習得だけに満足せず、複数の言語を学ぶことによる相乗効果と波及効果をねらいたい。日本語に多くの外来語に起因するカタカナ表現が存在するように、英語にも多くの外来語が入っている。prefer, senior, junior には than ではなく to を用いて比較を表す。家畜が料理されると beef や pork と別の単語に変わるが chicken はそのままである。こういった背景にある、英語を取り巻く歴史や言語的変遷を説明すると、生徒にはわかりやすいだけでなく印象に残り覚えやすい。

他の言語を紹介することも興味を引きつける。フランス語では、beaucoup や deux など、発音しないが綴り字を綴ることが英語に比べはるかに多い。英語の the にあたる定冠詞が le, la, les と3種類あり使い分けなければならない。またドイツ語には文法的性が男性・女性に加え中性まである。このような英語とは異なる言語的特色を紹介することで、英語が実はそれほど難しい言語ではなく、学習しやすいのだと気づかせ、英語学習への関心をさらに深めることができる。英語以外の言語を学習すれば、複数の言語の相違点や類似点に気づき、より豊かな言語学習となるはずである。さらに、国際化・グローバル化社会においては、母国語と英語以外の外国語を使いこなせる能力が新たな世界を拓くことになる。

また、英語においても、今日使用されている英語だけでなく Modern English や Middle English に対する知識が少しでもあると、英語史的な観点から現代英語の用法や語法を教えることができる。大名(2014)はアルファベットの起源と発達の変遷や書記体系の背景にある原理を詳細に解説しており、また綴りと発音の仕組みを系統立てて説いている。田島(2016)は中英語における統語法研究や頭韻詩の言語と文体をまとめた。すぐれた英語の研究は非英語圏から多数生まれているという考えに立ち、中英語で書かれたテキストを分析的に読み精緻な研究を続けてきた。日本人であること、日本で教育を受けたことを活かした研究を長年実践し成果を挙げてきた。外国語教育の

世界においても同様に、日本人であるからそこでの言語教育を推進していきたい。

6. おわりに

本稿では、英語教育改革が進む中で、筆者の授業実践に基づき、協調学習を成功させるために必要な指導法を提示した。また、アクティブ・ラーニングの手法のひとつであり、埼玉県立総合教育センターが推進する「知識構成型ジグソー法」という協調学習を取り上げた。生徒の主体性・多様性・協調性と、思考力・判断力・表現力の育成につながる指導手順とその成果を示した。さらに英語教員の意識改革を訴え、英語教育の展望にも目を向けた。

単一民族国家と言われる島国、日本においても、世界で活躍できるマルチリンガルな人材が増加することを期待する。生徒が将来、グローバルな社会を牽引する「人財」となるよう、その種まきを高校教育のフィールドでこれからも続けていきたい。目の前の生徒が将来、どのような花を咲かせ、人々の心をどのように潤してくれるのか、楽しみにしながら、そのための土壌づくり・種まき・水やりを欠かさない。そういう言語教育に関われることを誇りに感じる。そして、このような人材育成のためにも、わが国の外国語教育がさらに発展することを強く願う。国際化だとかグローバル化ということばが、生徒にとっても身近に感じられるような教育活動にしたい。

(埼玉県立越ヶ谷高等学校)

参考文献

- 卯城祐司(2011)『英語で英語を読む授業』, 研究社.
卯城祐司(2014)『英語で教える英文法一場面導入、活動で理解』, 研究社.
大名力(2014)『英語の文字・綴り・発音のしくみ』, 研究社.
小菅和也, 千田享, 田島久士編(2008)『語研ブックレット2 指導手順再検討』, 財団法人語学教育研究所.
上智大学 CLT プロジェクト編(2014)『コミュニケーション型英語教育を考える』, 株式会社アルク.
田島松二(2016)『中英語の統語法と文体』, 南雲堂.
投野由紀夫(2013)『CAN-DO リスト作成・活用 英語到達度指標 CEFR-J ガイドブック』, 大修館書店.

- 反転授業研究会編(2014)『反転授業が変える教育の未来—生徒の主体性を引き出す授業への取り組み』, 明石書店.
- 松井道男(2013)『受験英語だからこそ英語が話せるようになる』, 游学社.
- 三宅なほみ他執筆・編集(2015)『自治体との連携による協調学習の授業づくりプロジェクト 協調学習 授業デザインハンドブック—知識構成型ジグソー法を用いた授業づくり—』, 東京大学 大学発教育支援コンソーシアム推進機構.
- 村野井仁(2014)『第二言語習得研究から見た効果的な英語学習法・指導法』, 大修館書店.
- 文部科学省初等中等教育局(2013)『各中・高等学校の外国語教育における「CAN-DO リスト」の形での学習到達度目標設定のための手引き』.
http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/___icsFiles/afielldfile/2013/05/08/1332306_4.pdf [accessed 15 November 2016]
- 文部科学省初等中等教育局国際教育課(2015)「資料 6 初等中等教育の英語教育の推進に係る取組」.
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/058/siryu/___icsFiles/afielldfile/2015/12/25/1365545_5.pdf [accessed 15 November 2016]
- Davies, Paul. & Pearse, Eric. (2000) *Success in English Teaching* (1st Edition). Oxford: Oxford University Press.
- Harmer, Jeremy. (2008) *The Practice of English Language Teaching*. England: Pearson Education Limited.
- Nation, Paul. (2009) *Teaching ESL/EFL Reading and Writing (ESL & Applied Linguistics Professional Series)*. UK: Routledge.
- Nation, Paul. (2009) *Teaching ESL/EFL Listening and Speaking (ESL & Applied Linguistics Professional Series)*. UK: Routledge.

Study on Active Learning:
Collaborative Learning of the English Subject
at a Senior High School

Masako GOSHI

In this article, collaborative learning of the English subject is suggested based on lessons at a senior high school. Also, as one method of Active Learning, the Jigsaw Method, which CoREF and Saitama Prefectural Education Center have promoted cooperatively, is introduced and its merits are pointed out. Moreover, the article makes suggestions for English teachers regarding their attitudes and ways of teaching, and discusses the future of the English education in Japan.